

国土審議会北海道開発分科会
第5回計画部会議事録

平成19年10月31日

国土審議会北海道開発分科会第5回計画部会議事次第

日時：平成19年10月31日(水)

13:00～15:00

場所：中央合同庁舎3号館

10階共用会議室B

1. 開会

2. 議事

- (1) 第8回北海道開発分科会の意見について
- (2) 新たな計画の基本的事項について
- (3) その他

3. 閉会

(配付資料)

資料1 国土審議会北海道開発分科会計画部会委員名簿

資料2 国土審議会第8回北海道開発分科会議事概要

資料3 新たな計画の構成イメージ

国土審議会北海道開発分科会第5回計画部会

平成19年10月31日(水)

【高松参事官】定刻になりましたので、ただいまから国土審議会北海道開発分科会第5回計画部会を開会いたします。

皆様、お忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございます。本日の事務局を担当いたします参事官の高松でございます。

本日は10名の委員のご出席をいただいております。家田委員、上野委員、小磯委員、丹保委員、矢野委員につきましては、所用によりご欠席とのご連絡をいただいております。

これ以下の会議の進行につきましては、南山部会長にお願いしたいと存じますので、どうぞよろしくお願いたします。

【南山部会長】皆様、お忙しい中、ご出席いただきまして、ありがとうございました。

現在、これまでの議論を踏まえまして、計画素案の起草作業が非常にご苦勞な中で進められているところでありますけれども、10月10日、第8回北海道開発分科会におきまして、基本的な事項について委員の方からご議論をいただきました。計画部会においても引き続き検討を進めることになっております。したがって、今日は計画素案の作成に先立ちまして、分科会の議論についてご説明させていただいた上で、皆様からご意見をいただきたいと思っております。

議題1、第8回北海道開発分科会の意見について、議題2、新たな計画の基本的事項について、あわせて事務局から説明をお願いいたします。

【高松参事官】それでは、資料2、資料3につきまして、通して説明させていただきます。

資料2でございます。去る10月10日、北海道開発分科会が開催されたところでございますが、この席上で、これまで計画部会でも、7月の第4回部会で使用した資料を少し修正したのを使い、基本的事項についてご審議いただいたところでございます。

主な意見を紹介させていただきたいと思っております。2つ目のところでございますが、広域地方計画の北海道版はつくらず、北海道総合開発計画がこの機能、役割を有するという整理にしたいと考えているところでございますが、そちらの広域地方計画との関連で、もう少し具体的なイメージを持つものであるということでのご意見をいただきました。全体のところで、北海道庁さんのほうからも道の計画などをご説明いただいたところでございまして、道の計画、それから私どもの計画、2ついろいろなものを足し合わせて見ると、そういう機能があるということが全般にございまして、そのようなご意見がございました。

それから、アジアの中でこの地域がどういう特性を持っていて、どんな戦略を持つのかということをもう少し書くべきではないか。あるいは人口減少下でどのようなサービスを広域で確保していくか、このようなところがポイントではないかというご意見がございました。

それから、何回か出てまいります、やはり札幌一極というキーワードで書かせていただいております、札幌と札幌以外の地域の取り組みについて、幾つか意見をいただいております。

3つ目でございますが、総花的に見えてしまうところから、もう少し目玉をつけて、具体をまとめていくことが必要ではないかというご意見、あるいはこれまでの北海道のいろいろな取り組みの反省から、クオリティをアップしていくというトーンも必要なのではないかということでございます。

それから、総花的というところで1つ関連した意見でございますが、産業の部分というよりも、もう少し暮らしのところでいろんな見せ方の工夫をすべきではないかという意見がございました。

最後に、3ページの後段の真ん中以降でございますが、人口減少下のソフトランディングという認識が必要だと。あるいは、札幌の拠点性は高めていく必要もあるのではないかと。ということ等々、いろいろな意見をいただいたところでございます。分科会での議論も踏まえながら、資料3を整理させていただきましたので、今度は中身の説明をさせていただきたいと思っております。

資料3でございますが、表紙は「新たな計画の構成イメージ」ということで、これまでの表紙を使わせていただいております。次の1ページ、2ページ、3ページ目からは、今まではビジュアルにポンチ絵的に箱の形で施策を記述させていただいたものを少し文章の形にして、箇条書き、体言止めという整理で今回まとめさせていただきます。

資料3の表紙で簡単に構成をご説明させていただいて、あと中身の概要を簡単に説明させていただきます。

まず、第1章は「計画策定の意義」でございます。第2節「新たな北海道総合開発計画の意義」のところ、意義の整理を文言的にさせていただきます。

第2章は、前回の7月の部会の際に、ここのところは「計画の方向性と目標」と掲げておりました、前回はその方向性のところで「オープンで競争力のある北海道」、「サステナブルで美しい北海道」、このようなキーワードで2つの目標を掲げていたところでございます。今回は文言を精査いたしまして、戦略的目標ということで3つ掲げているところが今回の修正でございます。

第3章として「計画推進の基本方針」を書かせていただきまして、ここのところで計画の期間、主要施策、計画の進め方ということで、進め方については3つの柱、多様な連携・協働、新たな時代を見据えた投資の重点化、新たな北海道イニシアティブの発揮という3つの進め方のポイントを第3章第3節のところ、まとめさせていただきます。

第4章「計画の主要施策」はこれまでと同様の整理でございますが、5つの柱で、1つ目の柱が「グローバルな競争力ある自立的安定経済の実現」、3つの柱がさらにございまして、食に係わるもの、それから観光地づくりに関すること、産業群の形成、こんなまと

めにさせていただいております。

中身のほうを少し説明させていただきたいと思います。1ページ目のところで「北海道開発の経緯」でございます。このところは、これまでの基本政策部会で書かせていただいております北海道開発の歴史、あるいは6期計画の経緯などについて簡潔にまとめさせていただいております。

2ページ目では、「新たな北海道総合開発計画の意義」ということで、幾つかのポイントをまとめさせていただいております。これまでの部会での議論もございましたとおり、北海道開発の基本的な意義としては、北海道の資源・特性を活かして、その時々の方の課題の解決に貢献するということ。また、アジアの急激な経済成長、環境問題、人口減少・少子高齢化を迎える我が国の経済社会がどのように対処していくかが問題になっており、こうした時代の大転換期にあって、北海道は我が国の経済社会づくりをリードする役割を担うべきということ。北海道はさまざまな生産・社会活動を可能とするゆとりある空間と、21世紀に最も重要となる自然環境も十分に保持しており、北海道に特徴的な資源・特性を活かして、我が国の持続可能な経済社会づくりに貢献することが重要である。さらに、北海道では新しい課題に進んで挑戦するフロンティア精神が培われてきており、我が国経済社会が大きな転換期を迎え、国民の間に将来への不安や閉塞感が増している今こそ、北海道が新たな時代の先駆者としてフロンティア精神を発揮し、豊かな経済社会づくりのために、先駆的・実験的な取り組みに挑戦する、とすることが北海道開発の新たな意義であると整理させていただいております。下の3つの矢印は、計画策定の意義ということで、3つにまとめさせていただいております。

第2章になりまして、3～5ページでございます。3ページにはこれまで部会報告にございましたグローバル化、地球環境問題、人口減少・少子高齢化問題について簡潔にまとめさせていただいております。

そういった時代の背景を踏まえて、4ページの第2節として「北海道の資源・特性」をまとめさせていただきました。この第2節の資源・特性につきましては、後段のところを使うポイントをまとめたものでございます。これ以外にもあるかもしれませんが、とりわけこの計画の中で強調しておきたいものに限定してまとめさせていただいております。

第3節では、「今後の北海道開発の戦略的目標」でございます。1つ目の戦略的目標は「アジアに輝く北の拠点～開かれた競争力ある北海道の実現」ということでございます。北海道の美しく豊かな自然環境や冷涼な気候は、国内のみならず、アジアにおいても特徴的なものである。この異質性が生み出す魅力が強みとなる食関連・観光産業は、広く東アジア市場において競争力を確保する可能性、東アジア地域の急速な発展を地域経済発展の好機ととらえ、これら産業を核としつつ、東アジアや世界と競争し得る成長期待産業等の育成及びこれに向けた戦略的な条件整備を進めることにより、基盤となる食料供給力の強化の推進、これにより開かれた競争力ある北海道の実現を目指す、とまとめさせていただ

いております。

2つ目は、「森と水の豊かな北の大地～持続可能で美しい北海道の実現」でございます。地球環境問題をテーマとする北海道洞爺湖サミットを契機として、北海道の豊かな自然環境の保全・再生に取り組み、国民共通の資産として将来にわたって着実に継承していくとともに、地域の自然を最大限に活用し、美しい四季の風景等を保全・創出していくことにより、雄大な自然の恵みを体感できる北海道づくりを推進する。北海道に豊富に存在する自然エネルギー源など地域資源を活用した低炭素社会、循環型社会の構築に向けた先駆的な取り組みにより、環境と経済が調和した地域社会の形成を推進する、これにより持続可能で美しい北海道の実現を目指す、とまとめさせていただいております。

3つ目は、「地域力ある北の広域分散型社会～多様で個性ある地域から成る北海道の実現」でございます。北海道内の各地域において、高品質な農水産品を内外に供給する地域、世界に価値ある自然資源を保全し、観光に貢献する地域、東アジアへのゲートウェイとして、生産・物流の拠点となる地域など、すぐれた特色ある地域資源を活かした地域づくりを推進する。これらの地域の発展の基盤として、札幌を中心とする都市圏の機能により北海道全体を牽引するとともに、地方都市圏と周辺の人口低密度地域から成る広域的な生活圏において、都市機能の維持とこれへの交流・連携の強化を進め、人口減少・少子高齢化に対応した地域社会モデルを構築、これにより多様で個性ある地域から成る北海道の実現を目指す、とまとめさせていただいております。

次に「計画推進の基本方針」、第1節でございますが、計画の期間、21世紀前半期を展望しつつ、おおむね10年というまとめでございます。計画の主要施策として、前のページでご説明させていただきました3つの戦略的目標を達成するため、5つの主要施策を総合的に推進するというところでございます。

計画の進め方、多様な連携・協働、新たな時代を見据えた投資の重点化、新たな北海道イニシアティブの発揮、この辺につきましては基本政策部会の報告を簡潔にまとめた表現にさせていただいております。

8ページ以降は「計画の主要施策」でございます。全体を通じまして、今までポンチ絵でまとめていたものを多少文章的にする関係上、前後関係、あるいは中身が細部のところではいろいろ変わっているところもございますが、基本的な箱の枠組みはこれまでの部会の議論などを踏襲したまとめにさせていただいております。

「グローバルな競争力ある自立的安定経済の実現」ということでございまして、戦略的目標を受ける形で、開かれた競争力ある北海道の実現に向けて、我が国の食料安全保障を将来にわたって支えていくため、北海道の食料供給力を強化する、北海道の食の供給基地としての役割を一層高めていくことが必要、東アジアの急速な成長を地域経済発展の好機ととらえ、食に係わる産業の高付加価値化、観光地づくり、競争力ある産業群の形成を図っていくことが必要とまとめさせていただいております、強みを活かすという視点で、

農業、観光、産業群の形成、こういう順番で、これまでの順番でございますが、まとめてさせていただきます。

「食の供給力の強化と食に係わる産業の高付加価値化・競争力強化」につきましては、あとは構成だけの説明にさせていただきたいと思いますが、8ページのところで、競争力強化の観点からは農産物の視点、9ページに行きまして水産物の視点で、2つに分けたまとめさせていただきます。

それから、9ページ後段から食に係わる産業の高付加価値化・競争力強化ということで、これは一連のものとして10ページの頭まで。それから、2つ目の観光地づくりに向けた観光の振興ということでございまして、これもこれまでの議論を踏まえつつ、2つの柱、1つ目は「国際競争力ある魅力的な観光地づくり」という柱で、括弧書きとしては「地域固有の魅力を活かした個性豊かな観光地づくり」という視点と、「ホスピタリティ向上のためのハード・ソフトのインフラ整備の推進」ということで、これも極力簡潔な表現にさせていただきます。

それから、11ページに入りまして、観光の2つ目の柱として「リーディング産業としての観光産業振興」ということでございます。

「東アジアと共に成長する産業群の形成」につきましては、これまでの議論などもございまして、少し表現ぶりを工夫させていただいて、(1)に「地理的優位性」という言葉を使わせていただきました。とりわけ北米と東アジアの線上に位置するという、それからロシア連邦極東地域にも隣接、日本海側と太平洋側に港湾を有する、そういう交通の優位性などを前面に掲げた企業立地の促進ということを一番目の柱にさせていただきます。

12ページに参りまして、「強みを活かした産業の育成」ということで、この辺はそれまでの議論のとおり、IT、バイオ、環境・エネルギー関連産業と森林、2つに分けた記述にさせていただきます。

13ページに参りまして、産業の最後のところですが、「産業育成に向けての条件整備」ということで、金融の関係ですとか、人材の関係等をまとめて記述させていただきます。

13ページの後段から、「地球環境時代をリードし自然と共生する持続可能な地域社会の形成」でございます。これもこれまでご説明させていただきましたとおり、3つの柱、すなわち自然共生社会、循環型社会、低炭素社会の形成ということで、それぞれの柱に即して、環境関連の施策を記述させていただきます。

17ページに参りまして、第3節「魅力と活力ある北国の地域づくり・まちづくり」でございます。第3節はいろいろなことをまとめなければいけない重要な部分でございますので、この第3節だけで、17、18、19、20ページにまたがるボリューム感がございます。その中で、戦略的目標のところも踏まえる形で、1番目の柱を「広域的な生活圏

の形成と交流・連携強化等」という柱にさせていただいております。このところで、北海道の特徴的な地域構造であるところの広域分散社会というものがある程度しっかりと維持していくという観点で、それぞれの地域との係わり、あるいはそれぞれの生活圏の役割、それから札幌を中心とする都市圏の役割等々についての記述を17ページにさせていただいております。

18ページでは、広域分散社会、広域的な生活圏を支える意味でも、都市の機能強化、さらには都市の魅力の向上というものが不可欠であるという観点で、ここで少し都市の観点を4つ、「集約型都市構造への移行」「都市の魅力・活力の向上」「冬も暮らしやすい生活環境の創造」「ユニバーサルデザインの考え方を踏まえたまちづくり」、このような都市づくりの視点で幾つかの施策をこのところでまとめさせていただいております。

19ページでは、「人口低密度地域の活力ある地域社会モデルへの取組」ということでございまして、これまでも、前回の7月のときにはルーラル地域とかいう名前をつけていたのですが、素直な名前のつけ方にさせていただいております。このところで必要な施策を簡潔にまとめたということでございます。

19ページの下段では、それぞれの地域が多様で個性的な地域づくりをしっかりとやっていくべきであるということから、「多様で個性的な北国の地域づくり」に記載しております。それぞれの地域の特徴、圏域に分けているわけではありませんが、例えばいろんな地域と隣接地域があるとか、北方領土の隣接地域のことなど、その地域政策として特筆すべきものを最後のところにまとめさせていただいたものでございます。

それから、20～22ページの上までのところでございしますが、戦略的目標を支えていくための1つの視点として、ネットワークとモビリティの向上ということでございます。これもいろいろ部会の中でのご議論等々もございまして、物の移動もあるものの、人の移動もある。あるいは外国とのつながりもあるものの、道内のネットワークも大事である、と言った議論もございましたので、広域交通ネットワーク等の構築ということである程度束ねまして、その中で、1つ目には「高速交通ネットワークの強化」、2つ目として「国際競争力を高める物流ネットワーク機能の強化」というようなまとめをさせていただいております。

その中の2つ目の(2)として「地域の交通・情報通信基盤の形成」ということで、1つ目には、まちなか交通体系、地域の実情に即したモビリティの確保、22ページでは、情報通信体系の整備と利活用の促進ということで、情報通信も含めて地域交通の問題を施策に簡潔にまとめさせていただいております。

(3)として、「冬期交通の信頼性向上」をこのところに掲げさせていただいております。

最後に、「安全・安心な国土づくり」でございまして。これは、これまでの部会資料の箱のレイアウトとほぼ変わらない構造でまとめさせていただいております。また、基本政策

部会の報告などからも、これまでの考えを踏襲しながら、ある程度箇条書きにしていったということでございます。

「頻発する自然災害に対する防災対策の推進」の観点、23ページでは、「ハード・ソフト一体となった総合的な防災・減災対策の推進」、それから24ページの一番下の行で、(3)として「道路交通事故等の無い社会を目指した交通安全対策の推進」ということでございます。

それから、26ページでございますが、付記といたしまして、最後に、施策の推進に当たっては、この行政マネジメントをやる。それから、北方領土の状況が変化した場合には、この計画の改定を行うということを付記として掲げさせていただきました。

資料の説明は以上でございますが、なお、1点、本日も欠席の上野委員から、この計画への意見をペーパーでいただきましたので、この場でご紹介させていただきます。

北海道開発分科会計画部会に関して、このたびは会議に出席できず、ご迷惑をかけることをお詫び申し上げます。計画策定に当たり、次の点についてご意見を申し上げたいので、よろしくお取り計らい願いますということでございます。

北海道総合開発計画において、北海道らしさを出すとしたら、北海道の地理的な特徴を踏まえることは当然だが、他の府県と唯一異なる道州制について言及したい。現在の計画案には道州制について触れられておらず、表現の仕方については係わらないが、法で定められ、唯一北海道が道州制特区に認定されていることから、この枠組みの中で北海道の各市町村の望ましい連携による開発を示唆する表現があってもいいのではないかと考える。北海道登別市長上野晃。以上でございます。

【南山部会長】ありがとうございました。

それでは、皆さんにご審議をいただきたいと思いますが、具体的には資料の3、計画の基本事項についてであります。

成文はこれからですけれども、最初に、ご苦労いただいております起草委員の3人の委員の方に補足がありましたらお願いしたいと思いますが、先に佐藤委員、よろしいでしょうか。

【佐藤委員】それでは、起草委員として、ただいまの説明について追加をいたしたいと思っております。

この起草委員会というのは非常にハードでありまして、こんなに短期間に働かされて、最初の1~2回は何だという感じで、文章というか、この計画の枠組みや文言がある意味では耐えられないという感じで、本当に各起草委員の先生方がいろいろと意見を言い合ったと思います。ところが、最後になりましたら、だんだんと形ができてきまして、先週の10月24日にも開いたのですが、「随分よくなったね。努力の跡が見られますね。」と言いました。そうしたら、「だんだん糠床ができてきた」という言い方をされました。こなれてきたというのですかね。非常にわかりやすく、作業状況をうまく伝えたなと思うん

ですが、問題は糠漬けの嫌いな人もいます。糠漬けが大好きだったら大体わかるんですが、糠漬けの嫌いな人がいますので、この部会においてぜひそういう目線でご検討いただければと思います。

資料3の最初のところをごらんいただきたいのですが、大きな枠として、先ほど高松参事官のほうからご説明がありましたが、第2節のところ、この計画の哲学の部分をきちんと書こうということで、持続可能なとか、我が国の課題にいかに関与するかということ、これを明確に打ち出そうとしています。

第2章では、それを具体的な計画の目標としまして、「アジアに輝く北の拠点」とか、「森と水の豊かな北の大地」とか、「魅力ある北の広域分散型社会」という形で、目標を北ということ、これを明確に打ち出した上で書いてあります。

それぞれの1、2、3の目標に従って、具体的なものが第4章の施策になります。1節、2節、3節がまさにその第2章の3節にあるそれぞれの目標を具体化したものでありまして、それに従って施策が展開されていく。その施策を進めるに当たっての考え方とか、1つの価値基準が第3章であります。多様な連携を常に考えようとか、新たな時代を見据えた投資の重点化を常に意識しなければならないとか、北海道イニシアティブを発揮するようにしようということの視点を持って、第4章の各施策が展開されていくという構成になっております。

こういう形で、資料3の1ページ目のイメージ図で、大体今までの総合開発計画とは違う特徴とか、今回の強調すべき点がまとまっているのではないかと思います。

今日はそれぞれ体言止めの文章なんです、これをさらにきちんとした文章にするための作業が進められておまして、特に濱田さんは、言うのは面倒くさいから、俺が文章を書くというので原稿を渡したりとか、そのようにして起草作業をしております。

私のほうからは以上です。

【田村委員】それでは私から、2つだけお話し申し上げます。

最初に気にしていた部分は、今回の計画から大転換の時代を迎えることをどのように読む側に伝えられるかです。少子高齢化、グローバル化などの点で大転換の時を迎える。7月30日の段階で既に示してあったことでもありますけれども、大転換を伝える部分は、経済と環境のバランス、サステナブルという言葉で書いてあるんですけれども、そのバランスを上手に取ることで、北海道は全国の地域ブロックに先駆けて自立的な発展の模範の例となろうということでございます。

本計画で特に重要と考えていることを2つ申し上げます。

1つは目標についてです。北海道の財産である豊かな自然を使って、地球環境に関して北海道を全国に先駆けて開発していこうと目標2で謳いました。そしてもう1つ、目標の3番目として、多様な個性ある地域をつくっていくことを掲げました。「地域力ある北の広域分散型社会」ということで、2章3節の3のところ、ここに書いてありますけれども、これ

も1つの大きな目標なんだということで打ち出しているところがポイントかと思います。

それから2つ目でありましてけれども、3章の3節の3「新たな北海道イニシアティブの発揮」というところの記述であります。7ページ目の3のところでありましてけれども、2段組みになっていて、一番最初のところに、先駆的・実験的な取り組みがいかに必要なをイントロダクションとして書いてあります。

下の段落は、長く文章がつながっているのでありましてけれども、取り組みが2つ書いてあります。最初のところに、北海道の優れた資源・特性を活かして、北海道スタンダードをつくって、北海道固有の課題に対する独自の取組をします。2つ目が、我が国経済社会の変化に応じた制度設計のフロンティアとなる、他地域にも共通する課題に対する北海道の特性を活かした先駆的取組をします。この2つの取り組みを通して、我が国の経済社会づくりをリードする新たな北海道イニシアティブとして積極的に推進していく。そのあたりの文言、まだ足りない部分があるかもしれませんが、これがいかに北海道民、全国の国民に通じるのかということにいろいろ悩ましい努力をしたということでありまして。

【濱田委員】図らずも起草委員になってしまって、本当はこちら側に座って好きなことを言えるほうがよかったです。自分の文章を書くのに比べて、非常に難しい作業だなということを実感しています。いろんな色の糸があって、これを組み合わせていって、人にわかる模様にしていくというような作業に似ていると思います。

佐藤先生も田村先生もおっしゃいましたけれども、どうしてもこれだけは書きたいねということが幾つかあって、1つは、なぜ北海道だけの計画を国がつくるのかということにはっきり答えたい。北海道総合開発計画の意義ということをもう一回再論する、現時点で国民にわかりやすいように訴えることがどうしても必要だろうと。だから、それはどうしても書きたいねということが1つ。

それから、ややもすれば北海道は遅れて、未発展で、現在もそんなに豊かではない、だから、国の施策がいろいろ必要だという言い方をするのだけはやめよう。こういうところは必要だからやってくれと主張するのは当然なのでしょうけれども、そういう言い方だけにするのはやめよう。それが田村先生もおっしゃった北海道イニシアティブという話につながっていくのだらうと思います。日本が抱えているいろんな問題を北海道が率先して解決していきましょうねということで、一貫して書いていきたいと思っています。

3人の起草委員のうち、お2人の先生は工学部の先生で、私だけが1人、分類上、文科系ということになっていきますので、私の仕事はこの報告書を人が読んだら読みやすい、論理構成がわかりやすいものにするのが仕事と考えています。事務局のつくっていただいたものを、人が読んだときに読みやすく、飲み込める内容にしたいと思っています。原案がここの会議に出てきて、ちっともそうならないじゃないかと言われると困るんですけども、残された時間はちょっとなのですが、できるだけのことをしたいと思っています。

す。

【南山部会長】ありがとうございました。

佐藤委員からも少し話がありましたけれども、無理な日程の中で大変なことをお願いして、皆さん大変ご苦労されているとっておりますが、いましばらくよろしくお願いしたいと思います。

それでは、糠床がというお話がありました。これはやはりいいキュウリとか、いいナスビを入れなければ物になりませんので、ぜひ皆さんからご意見をいただいて、いいものにしていきたいと思っております。

これから皆さんにご意見あるいはご質問をいただきたいと思っておりますが、進める都合上、2つに分けて、最初は、資料3の1ページ目の分類で1章、2章、3章と大きな枠で囲ってありますけれども、この部分を総論と称しまして、総論の部分について初めに議論をしていただき、その後で4章の各論についてご意見をいただきたいと思っております。

それでは、最初、1章、2章、3章の総論部分に関することでご意見、もちろんご質問でも結構でございますが、ございましたら、ぜひいただきたいと思っております。

【加藤委員】今、具体的な計画を伺ったのでございますけれども、私個人が考えておりますのは、我が国の課題の解決にいかには北海道が貢献できるかが今回の開発計画の一番大きな意義なんです。その前にちょっと皮肉的な言い方をしますと、逆に北海道が我が国のいろんな課題に対して足を引っ張っているという点が、いろいろ議論をしますと、あちこちで散見されます。

例えば貿易にしたって、約1兆円の債務超過でありますし、観光についても、今は何とか伸びておりますけれども、最近の観光行政はいま一步元気がなくて、ちょっと下りぎみになっているという問題、もう少し積極的な打ち出し方をやらなければいけません。エネルギー問題などにつきましても、CO2の家庭の排出量は、都道府県で言うと北海道が一番多いという実態があります。それから、人口問題にしましても、全国で一番少子高齢化が進んでいます。これをまず解決して、具体的に北海道が国に対して足を引っ張らないような施策をまず早急に打たなければいけないのではないかと。そこに対する対応をまずどうするか。その上に立って、北海道が地域として、そして祖国のためにもお役に立てるようなものにするというシナリオが、これは大変失礼な言い方ではありますが、ちょっと理想郷からスタートしているような気が率直にしたというのがこの総論での点です。

それからもう1つ、総論で、さっき上野さんからもありましたように、問題点を掲げて具体化を進めるためには、やはり手段というものとリンクしていかなければいけないと思っております。その一番大きな手段が今問題になっている道州制でありますけれども、道州制という言葉は直接この文章には書けないと思っております。しかし、それを暗に頭に置いた特区、こうしたものを一つひとつ解決していくための地域の開発問題、北海道の特異性というのがあるわけですから、その特異性を発揮できるような、特区構想に結びつくような

集約の仕方、そうしたものが具体的に見えてくれば、もう少し全体の地域の方々 我々はみんなわかっているのしょうけれども、一般の方々にもわかりやすい、取りつきやすいもの。計画は10年間ですから、その10年間の中でやらなければいけないのがこの計画ですから、そこはもう少しメリハリがつけられるのではないかなという気がしております。ちょっと勝手なことを申し上げます。

【櫻井委員】主として第4章のほうで申し上げたいと思っていたのですが、総論的なところで言うと、資料を読ませていただきまして、随分よくなったなというのが印象でございます。結構いいじゃないかと思っていたら、陰には並々ならぬご尽力があったということで、やっぱりそうかと思いました。全体としましてはなかなかいい感じになっているのではないかなと思いました。

特に第2章の第1節のところで、環境変化とその国家的課題を書いておられるんですが、それから具体的な施策、国家的な施策と結びつける形で後で付言されるということもあって、ここもグローバル化の話と地球環境問題、それから少子高齢化、この順番も含めて大変秀逸ではないかと思っております。とりわけグローバル化の話は、私は農業の話が極めて重要だと思っております。そういう意味では後者のほうでも、もっと後々具体化できるように書き加えていただくとさらにいいのではないかなと思った次第です。

それから第3章は、ここはさっき田村先生がおっしゃいましたが、北海道イニシアティブの発揮というのは極めていいアイデアというか、いいワーディングだと思います。北海道スタンダードと先駆的取り組みというので、我が国の経済社会づくりをリードするというような区分けも極めていいなと思っております。北海道は遅れているところもあるんだけど、それがむしろ打って出るためには好条件になるところがあって、そういう形で転換していかれるといいのではないかな。農業はまさにそういう話でしょうと考えております。

全体はいいんですけども、資料3の一番最初の表紙の部分の書き方は、本体をつくる時にこれが残るのか残らないのかわかりませんが、第3章の枠がちょっと太過ぎるんですね。つまり、先ほど佐藤先生のご説明によりますと、第2章の第3節に3つ大きな柱があって、それが第4章の第1節、第2節、第3節につながっていくというお話なので、ここが重要なんですね。何か第3章が邪魔なんですけれども、もうちょっと半分ぐらいにしないと、何でこれが同じようなレンジで書かれているのかというような違和感がございまして、ビジュアルな観点で言うと、修正の余地があるかなと思いました。

【生源寺委員】今、櫻井先生のおっしゃった部分で、私も大変いい形になったと感じているところがございます。先駆的・実験的な取り組みという部分に対応するところをスタンダードとイニシアティブという格好に分けて、さらにきちんとしたものになったということかと思います。多分これはこの中にはなかなか書けないと思っておりますけれども、では、具体的にどんなことがあるかということのいろいろ想定して表現ぶりも考えていく必要があ

るだろうと考えております。

私の専門分野の農業の政策に関しましても、都府県と北海道ではおよそ構造が違っているということがございますので、いろんな点でということがございます。ただ、いずれも既存の制度、政策があるわけでありまして、結局、その見直しなりの議論が大事であって、真っ白なところを書くことのできるものというのは実はほとんどないのだろうと思うんですね。そういう意味では、これを実行していくということは、ある意味でかなりの摩擦なりも覚悟の上でということがあると思います。北海道、ひいては日本全体のためになるという観点から、ここは遠慮することなくチャレンジしていく、その突破口として非常にいい表現になっていると思います。

それから、全体の構成イメージのところを見ていて、これはほとんど趣味の問題なんですけれども、「計画の目標」の3節の表現がなかなか魅力的になっているわけですね。「アジアに輝く北の拠点」、「森と水の豊かな北の大地」、ただ、この3番目の「地域力ある北の広域分散型社会」というのがちょっと弱いような感じが、これは趣味の問題なんですけれども、「広域」と「分散」が少し重なっているような感じがあるのと、「広域」と「分散」というのは事実であるわけですね。「地域力ある」というところであるべき方向性を出していますけれども、例えば「広域連携社会」とか、中には「連携」という言葉がかなり入っていますし、「交流」という言葉も入っていますけれども、ごちゃごちゃいろいろ加えるのは何であるとすれば、そのような形でもう少し方向性みたいなものを強調してはどうかなと。この3つのキャッチフレーズは非常にいいアイデアというか、今多少申し上げましたけれども、非常に結構なものではないかと思っております。

【宮谷内委員】全体的にはよく取りまとめられているなと思っておりますが、ただ、2点ばかり疑問に思っているところがあります。

1つは、道内の総生産額が約20兆円となっているのですけれども、実は19兆6,600億円が、それぐらいしかなかったのではないのでしょうか。少し前ですから、平成17年か16年はそんなもので、こうやって20兆円と上げてもいいのかどうか。前の道の長期計画には25兆円にするとなっていたのですけれども、たしか19兆6,600億円ぐらいだったと思います。年々下がっていったのですよね。

それが1つと、もう1つ、12ページに「カラマツ人工林等の森林資源が充実」と書いてあるのですけれども、実は活用がすごく増えまして、私たちの情報では林齢が偏っていて、将来に不安があると言われております。つまり、長続きがしないと。戦後、山にカラマツを植えていたおかげで、そのバランスが、このまま適齢ばかりにきていますから、切ってしまうと長続きがしないということで、この「充実」という言葉は、「充実させる」ということなのか、「充実している」ということなのか、ちょっと細かいことを言って失礼ですが、そのように感じました。

【南山部会長】ありがとうございました。総論についていろいろご意見をいただきました。

また今後の参考にさせていただきたいと思います。

それでは、多分皆さん、いろいろなご意見があるのではないかと思います各論につきまして、それぞれご意見をいただければと思います。

大変恐縮ですが、また嵐田委員から順にお願いします。

【嵐田委員】それではまず最初に、道の新しい総合計画の動きをご報告させていただきます。

7月の計画部会におきまして、道の計画原案をご説明させていただきました。その後、9月に計画案を道議会に報告し、先日、道議会で集中審議がございました。相当いろいろな意見がございまして、まず1つは北海道の目指す姿、特に北海道の独自性、優位性についての記述が少ないということ、2点目といたしまして、1次産業や地域産業の振興も薄いということ、3点目といたしまして、地域づくりに関して特に札幌一極集中の是正、疲弊する農山漁村の維持、6つの連携地域の連携の内容などが具体的に見えないというようなさまざまな意見をいただいております。現在、こうした意見を踏まえまして必要な修正を行った上で、できるだけ早い時期に知事の附属機関である北海道総合開発委員会への諮問、答申を経て、道議会でさらにご論議をいただいて、成案としてまいりたいと考えてございます。

今、そういった観点で見直ししている中では、独自性、優位性といったものを少し書き込むこと、厚みのある地域経済の形成という1項目を起こしたこと、計画の推進体制も書き込むことなどの作業をしているところでございます。

次に、資料3の「新たな計画の構成イメージ」のうち、第4章第3節の地域づくりに関しまして、2点だけ意見を述べさせていただきたいと思います。

1点目は、17ページの(1)「広域的な生活圏の形成と交流・連携強化等」についてでございますけれども、本日の資料におきましても、本道の広域分散型の地域構造を踏まえて、広域的な生活圏を単位とする地域社会の形成が必要であるとされております。この広域的な生活圏と、道が地域づくりのエリアとして設定する6つの連携地域との関連につきましては、国の計画の素案の作成に向けまして少し整理をさせていただきたいと考えてございます。

2点目は、今回の議会でも非常に大きな議論になりました、札幌を中心とした都市圏の役割に関してです。現在、この道議会での議論を踏まえて道の計画案を修正することを検討してございます。私どもとしては札幌市とその周辺地域につきましては、本道の経済産業分野における国内外の競争をリードする、そういった本道全体を牽引していく役割、北海道の玄関口として人や物の円滑な移動を支える拠点機能を期待されているという認識のもとに、今後も都市の活力と魅力を高めながら、国内外からの観光客、あるいは研究者を引きつける国際交流機能、高度な学術研究機能を発揮していくことが北海道全体の振興を図る上で必要であると考えてございます。

一方で、札幌と他地域との間で相互に機能を活用し合って、双方がメリットを享受できる関係を構築していくことが重要であると考えてございまして、必要な交通ネットワークの形成、あるいは情報ネットワークの構築、地域との連携を深める仕組みづくりを今後進めていきたいと考えてございます。したがって、今後、国の計画の素案の検討に当たりましては、こうした道の計画の考え方につきまして十分ご配慮をいただきたいと思っております。

いずれにしても、引き続き北海道局さんとは密接な連携を図らせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【加藤委員】7月の会議の折だったと思いますけれども、もう少し札幌のことを語っていただけないかという発言をさせていただいてございます。現に人口の3分の1、経済規模もそのぐらいを占める都市が道内に現存するということから、それをどううまく北海道全体で使うのかは大事な視点だと思います。そこで、今回、17ページのところに相当具体的に書き加えていただいておりますので、そのあたりのご努力、感謝申し上げたいと思っております。

今、嵐田副知事から端的に札幌圏という位置づけのようなお話もございましたけれども、例えば最近の具体的な数字の動きでちょっとご紹介させていただきたいと思います。従来、私も含めて周辺の市町村は、どちらかというと、言葉は悪いんですけども、札幌市のベッドタウン的な機能を担っていました。夜間人口、昼間人口を比べると、関東の大都市とは相当大きな開きがありますけれども、やはり札幌に就業に見える方が多いだろうとずっと実は思ってまいりましたが、この数年、センサスなどの統計を具体的に比べてみますと、石狩市と小樽市については逆に札幌から向こうに就労のために出ていく。向こう側で働いている昼間人口がいるというデータも出てまいりました。

これはデータとしてはそうですが、現実の問題として、例えば新聞社の印刷工場はほとんど全社、札幌市域外のところに工場を構えろとか、ビール工場とか、発寒の木工団地が転地、札幌から抜けてよそへ移転をするというふうに、従来のパターンと違うような企業集積が逆に郊外部に進んできています。要するに、設備投資をしてリニューアルしなければいけないときに、札幌市内では地価の問題、規模の拡大ができないので、郊外に安い土地を求めてという動きになってきていることはこういうことで証明されたかと思っております。したがって、今や札幌市域の中で何かを語る、石狩市の中だけで物を語るという時代ではないということがはっきり証明されたと思っております。都市圏域全体で物を考えなければいけないということがはっきりしたというご報告が1つできるかと思っております。

さて、道内全体ということになれば、これはまた違うステージがあって、嵐田副知事も地域間の互恵の関係をどううまくつくっていくのかという意味合いの後段のご発言がございました。一都市でできることは限界がおのずとありますけれども、今、その足がかりになるような事業を実はこの数年の間に立ち上げてしまいたいと思っております。

1つは、商業活性化ということもありますが、例えば今考えておりますのは、狸小路の空き店舗のようなところを札幌市が借り上げをいたしまして、そこに道内市町村の戦略的な高付加価値化の商品、食品でも何でも、そういうものを展示して、テストマーケット的に使っていただく。来街者から見れば、道内のいろんなものが並んでいて、ショーウィンドウのような役割をする。そういった施設をまず1つつくってみたいと実は思っています。

これは、夏の間にはリンケージアップというフェスティバルがございまして、道内の110ぐらいの市町村が参加する食品系の物販のお祭りでございます。大通りの街区を3つ4つ使いまして、20~30万の市民が集まってくるというイベントなんですけど、それを常設化するような仕掛けができないかということで、札幌という人口集積のあるところをうまくビジネスチャレンジとしてとらまえるというとらえ方もできましようし、全国に打って出る商品をあらかじめ売れるものか、売れないものかというテストングをしてみるとか、いろんな機能で使えますので、そんなことも札幌として当面できる1つの足がかりかなと考えております。

実は道内の市町村の皆さん方が札幌にどういうものを期待しているのかというニーズそのものの把握を私どもも十分してきてございません。これは大変恥ずかしいお話ですけども。今回、リンケージアップで全部アンケートを出しておりますので、今、分析等しております。そういう中で、札幌としてできるものを見つけていきたいなと思っております。

それから、環境の問題が非常に大事なウエートを占めているというお話がありました。環境の問題は自然の環境保全をするという分野と、お話があったように、CO2対策をどうするかという問題があります。CO2はロットの大きなところでやらないと、なかなか大きな成果が見えないということがありまして、そこは先鞭をつける意味で札幌市は頑張りたいと実は思っております。新年度に向けて、来年はサミットもございしますものですから、環境元年という位置づけで我々は考えてございます。これはあくまでも1つの仮説でございますが、今具体的なやりとりは始まっておりますけれども、例えば家庭系で暖房というところは、省エネ型とか、天然ガスの器具を入れるときに助成金をつける、補助をするといった仕組みを今関係機関とで調整しております。

もう1つ大きいのは、車のエネルギーをどうするかということも1つあります。これはいろんな考え方があるのでしょうけれども、例えばトラック業界では天然ガスを使うごとに5円の補助を出すという動きがもう始まっております。札幌市内には大体7,000~8,000台のタクシーがLPGで走っております。これを仮に天然ガス転換をすれば、石油レベルから比べれば、間違いなく25%のCO2削減になる。業界がこぞってそのぐらいのロットでもってエネルギー転換をするというのは、相当インパクトのある事業になる。今、そんな議論をちょっとしております。

そのときに大事なのは、やっぱりハード系の整備が伴うと思います。供給ステーション

をどうするかという問題、それから自動車そのものの機器をある程度手直ししなければならないという問題が出てくる。そういうときに、財政的にどんな支援がしてやれるかというあたりを整理しなければなかなか実現はしないと思いますけれども、そのぐらいのロットの先鞭をつける。イニシアティブであったり、フロンティアであったりというのであれば、そんなことも手がけなければならないのではないかと考えております。いずれ具体の計画のところまで整理をしたときに、国もしかり、道もしかり、それから特区の申請とか、いろんな制度を活用して実現したいと思っております。そういう意味で、今回の北海道イニシアティブとか、フロンティアという部分は後押しになっていただけたらと思っております。

【坂本委員】私も総論的なことで申し訳ないんですけども、前回お聞きしたスケルトンの内容から、今回はかなり具体的な施策が盛り込まれておりまして、これだけやれば本当にすごいなと思っております。今、国土形成計画が検討されておりまして、日を追ってといいましょうか、日本全体ではもう国土の開発は終わったと。成熟時代に入って、もう「開発」という文言はやめて「形成」にしようという中で、北海道だけはまだ総合開発計画という形になっているわけでありまして。私は、北海道は中央が考えているような成熟期に入っているとは全然思っておりませんで、まだまだしっかりした開発や基盤整備が必要だということで、この総合開発計画が今回で終わらないような形でぜひまとめなければいかんという気持ちを持っております。

そういう意味では、非常に具体的ないろんな施策がたくさん盛り込まれているわけでありましてけれども、やはり前回の意見にもありましたように、これはというしっかりした目玉が幾つか、誰にでもわかるような、そして結果が10年後、あるいは10年の間に出てくるような引き出し方はないものだろうか。書いてあることはいずれみんな必要なことばかりであります。そういう点で、もう1つ表現の仕方といいましょうか、打ち出し方、必要性、書いてあることは全部必要でありますから、そういう点を少し私も考えなければいけないと思っております。

例えば環境問題は非常に大事だという話がありますがけれども、これはただ大事だ、大事だ、北海道はそのための条件がそろっているとただだけでは、それ以上どうやって進めていいかわからないわけでありまして。これは誰かがおっしゃっていましたが、例えば国際的な環境機関を北海道に誘致するというのをこの10年間の間に努力するということになれば、サミットではないですけども、必然的に環境に対する道民の考え方が変わってくる。何かそうした案というのでしょうか、ここに書いてあるものを具体的に実行に移すような動機づけ的なものが何かここに盛り込まれてくると、メリハリがつくような気がいたします。

それからもう1つは、ハードというか、経済あるいは環境という問題ではなくて、北海道そのものが元気になるためには、地域の活性化、やはりソフトパワーといいましょうか、

北海道で今一番元気があるのが野球でありまして、あるいは旭山動物園だったり、PMFだったり、そうしたものに道民が燃えて、ワーツと活力を出していく。そうした楽しむ産業というソフトパワーとの結びつけ、そうした観点から何かメリハリ、ここに書いてあるものを表に打ち出して、それに向かって道民もやるんだというのを、周りの方々も北海道をこれで応援したいというものがあればという、単なる感想でございますけれども、そのように思って、内容は本当に前回と違って具体的な内容が盛り込まれて、非常に結構だと思います。

【櫻井委員】私は、第4章の第1節の「グローバルな競争力ある」云々というところなんですけれども、最初のところに食料供給力のお話を書いてあります。私にもわか勉強なんですけれども、農業政策の行政領域は大変広いですが、農業の話在最近勉強するようになって、まあ、こんなことになっているのかという感じでした。もともと行政の特徴として言いますと、農政というのは非常に内向きで、行政スタイルとしても極めて古くて、法律学者とは接点なんか持たないような感じで、農水省というのは非常に遠い省庁だったんですね。

ところが、最近、ここ10年か15年ぐらいになりますと、国際的な動きがにわかに急激になってきて、ここの報告書の中でもWTOとかEPAの話が出てまいりますけれども、国際的な議論がどんどん進んでいってしまう。しかも、我が国としてはもちろん拘束されることになるし、それをさらに国内の農政への転換というところにつなげていけないといけないわけですね。それは国内的にどうするかという話ではなくて、待たなしで国際的に動いていってしまっ、それにどんどん対応していかなければいけないという意味で、未曾有の状況に直面しているのではないかと考えております。それに行政は本当に対応できるのかということが、ある種、危機感を持って見ているところなんです。

そのうちの1つに食料自給率の話もございまして、どうするのかと考えたときに、これは食料供給力の強化ということで北海道のお話を出されるのであれば、まさにそういう荒波の中で、激動の農政のいろんな矛盾はあるわけけれども、食料生産地としても、受け皿として向こう10年ということになれば、まさに10年の間に現実化するような話なので、少し先駆的というか、先駆的ではないような感じもしますが、受け皿として北海道は出ますよというのがもっとパーッと出るといいなと思ひまして、これは1ポツの真ん中辺の下から3番目ぐらいのポツのところにも書いてありますけれども、せっかく第2章でグローバル化の話が出てきて、それから北海道イニシアティブという議論があつてということになりますので、そこをもう少し筋がつながるように書かれるといいのではないかと、ということが1つです。

関連しまして、もしそういうことを言うのであれば、(1)で「食料供給力の強化」と書いておられるんですが、単にたくさん増産すればいいという話でもなくて、それは必ず農業の経営スタイルの構造改善みたいなことが絶対必要なわけで、そういうこともあわせ

て二本立てでいかないといけないのではないか。そういう点で、本州では過疎の話とかで、なかなかうまく株式会社で大規模な経営をやるなんていうことは難しいところに来ているときに、どうぞパイロット自治体的な、北海道でそういうことをモデル的に出せるといいのではないかなと思っています。それは政策的にも非常に先駆性があるでしょうし、ほかでできないところをやっていただくという感じでやられると、まさに農業政策に対する北海道からの発信力という意味でも重要ではないかというのが1つです。

もう1つは、20ページの第4節、交通ネットワークの議論で、これは前からちょっと申し上げているのですが、私は北海道には何の縁もなく、それが1つの特徴なんですけれども、北海道の外にいる人間からすると、まず、北海道にどうやって行くのかというのが一番の関心事項になります。北海道の中で便利だということも重要でしょうけれども、外から見ると、アクセスが容易なことが重要です。そうすると、まず大事なのは恐らく空港と港湾、それから新幹線をつなげるという話がもしあるのであれば、そういうことも係わってくるのかもしれませんが、最初の「高速交通ネットワークの強化」と「国際競争力を高めるための物流ネットワーク機能の強化」の間にもう一個あるのではないかという気もいたします。いずれにしても、インフラという点で言いますと、空港と港湾がすごい重要なんですね。

少しトーンが弱まっているんですけども、あまり道路のことを言うのはよろしくないですねということは前から申し上げていて、道路はちょっとあきらめたほうがいいですよ。将来性はそんなにないので。特定財源も、空港とか港湾のほうに特定財源にしたほうがいいぐらいで、そこはいずれにしましても国民的な支持が得られるような話ではないのでしょうから。だとしますと、空港と港湾は非常に行政が遅れていますでしょう。ものすごく遅れているんですよ。もう耐えられないぐらい遅れていて、これをもっとちゃんとやらなくてはいけなくて、国ベースの政策ということと言うならば、空港整備法だって変えなければいけないでしょうし、港湾法だって、本当に全部変えたほうがいいというのが私の意見なんです。

そのようなことを考えますと、この20ページ、21ページのところでは、まず道路色を総体的に薄めていただいて、空港と港湾をもっと出してもらいたい。やはり外から行く人間から見てどうかですから。国内の外にいる人と外国の人、それから物流も含めてということですけども、それをまずやっていただいて、その後で、じゃあ道内の高速交通ネットワークをどう強化しますかというぐらいにちょっと落として書かれたほうが、シンパシーを持って受けとめられるのではないかという感じがしております。

【南山部会長】中に住んでいる人間から見ると、北海道の広さが道路を必要とする一番大きな理由なんですね。ここで議論するつもりはありませんけれども、関東と甲信と東海地方を全部合わせたぐらいの広さがあるんです。そこに道路がほとんどない状態の中でどうやって生きていくかという問題もまた別にあるんですね。その辺のところをどう折り合い

をつけるかというのがなかなか難しいところではあるんです。飛行機に乗るだけでは行けないものですから。

【櫻井委員】それはよく承知しているんですが、もしそう思われるのであれば、ちょっと控え目に言ったほうがかえって効果的ですよという意見なんです。

あとついでに思い出したので言いますけれども、24ページ、「道路交通事故等の無い社会を目指した」というのは、これはまたマイナーな話で申し訳ないんですけれども、どうしてこんなにいっぱい書かれるのかなというのが、バランスとしてどうかと思っております。

【佐藤委員】この計画部会に入って非常によかったなと思うのは、7月11日に寺島さんが札幌においてになられて特別講演をされました。そのとき私自身の目線がやっぱり北海道内だったなということでありまして、寺島さんの講演を聞いて、改めて北海道の地理的特性が極めて優位であり、こういう都市は世界にもないという実感をもっと持っていて、持つべきではないかなと思いました。

その中で、日本とアメリカの貿易よりも中国の貿易が増えてきて、これはますますそうなってくるだろうと。太平洋ベルト地帯は破局化するだろうという極めて刺激的なことを言われております。さらに、ロシアはバルト三国とかウクライナが独立したことによって、海へ出る都市はウラジオストクしかなくなる。そうすると、そこに拠点を持って戦略を考えてくるはずだと。それを北海道はどう受けるかという話をされましたが、その視点は私は持ち得ませんでした。そういう世界戦略から見たときに、実は北海道には新千歳空港があり、苫小牧港があり、石狩湾新港があり、それぞれ新しくつくってきたというのは、本当に先人の見識といいましょうか、それに関して非常に敬意を表するというのか、砂地にああいう港湾をつくって、まさにこれからの極東、どちらかというところヨーロッパ、ロシアを含めての世界戦略の中での北海道の位置づけの重要性が増してくる。

そういうことの寺島さんの趣旨が具体的になったときに薄れてしまって、東アジアという形である意味ではスッと一般化してしまっている。もっともっとサハリンではなくロシア本国ですね。ウラジオストクがロシアが持つ唯一の港湾都市だということを北海道がもっとねらいを定めていく、一番の絶好の地理的位置にいるということはぜひ具体的に中に織り込めたらなと思っております。

【生源寺委員】2つお話し申し上げるつもりでいたのですが、櫻井先生が農業政策のことをおっしゃいましたので、私も何も申し上げないわけにはいかないかなと思ひまして、一言、二言申し上げたいと思います。

私自身は7月まで食料・農業・農村政策審議会の企画部会長でありましたので、同じ意味であるのかどうかわかりませんが、今の状況を大変憂慮しているところでございます。2つ申し上げたいんですけれども、食料の供給力と申しますか、自給率については、国際規律あるいは国内の財政事情を無視すれば、一時的に引き上げることはできるはずで

あります。要するに価格を上げて、カンフル剤を与えれば上げることはできるはずであります。ただ、それは長続きしないであろうという判断が私にはあるわけです。

8月10日に発表されたように、40%が8年続いて、1%下がったわけです。1年ごとの上下動にそう一喜一憂する必要はないのかもしれませんが、私自身はかなり深刻に受けとめております。と申しますのは、現在の自給率の低下は要するに農業の力の低下とほとんど平行であると言ってよろしいわけです。つまり、農政改革、あるいは農業の再建の遅れが自給率にあらわれていると考えるべきであって、そういう意味では大変憂慮すべき状況にあると思っております。

ただ、北海道の場合には実力のある農業が育っているわけです。戦後の50年で、全部の経営の平均規模で、北海道は多分5倍ぐらいになっていると思います。都府県では1.数倍というところでありますから、全く経済成長への適応が違っているということがあるわけです。ですから、北海道の場合は、都府県でも全体としてそうあってほしいわけですが、農業の力がつくことによって、持続的な形で供給力なり自給率が上がるという観点はますます重要になっていると思います。

それから、政策についてはいろんな評価があるかと思えますけれども、この5年あるいは10年の農業政策というのは、遅い歩みではありましたが、昔とは違っていい方向に変わってきていると私自身は思っております。ただ、この半年程度の期間だけを見ますと、こう言うとちょっと申し訳ないのですが、野党はもちろんでありますけれども、与党も農業戦略なき選挙戦術みたいな状況になっていまして、非常に心配であります。もしそういう競うような形で農業政策が行われるとすれば、これはもう数年たてばしっぺ返しに来て、見るも無残な形になるのではないかと思っております。ちょっと余分なことに長い時間を使いまして申し訳ございませんでした。

第4章の部分でございますけれども、2つ感じたところがござります。1つは食品産業と観光です。農業と食品産業の連携、あるいは観光の連携ということはさんざん議論されてきていて、ここで改めて繰り返すことはしないのですけれども、食品産業と観光の特にサービス業の部分は、全体として中小企業、零細企業が多いわけですね。食品産業もそうですし、あるいは観光についてもそういう部分が多いわけです。まだまだその力を発揮しきれていないというか、スイッチが入っていないというか、そういう面は私は否めないと思います。これは北海道に限らないのですけれども、例えば食品産業などの場合、個性的という言い方をすればいいわけなんですけれども、逆に言いますと、独り善がりな経営者もやっぱりあるんですね。もう少しそれぞれの企業だけではなかなか実現できないものがあるんです。

例えば食品産業であれば、クレーンに対する対処は大企業であれば非常にはっきりした形のマニュアルなり方針があるわけですが、中小零細ということになると、まことに粗末な処理ということがあられるわけですね。こんなことは、食品産業、企業が地域の中

で勉強会をするなり、そういった形でレベルアップを図ることはごく簡単にと言う言い過ぎかもしれませんが、できるはずなんです。あるいはマーケティングもそうですし、新製品の開発もそうなんですけれども、中小零細の企業が多いだけに、食品なり観光なりの場合には、その地域、あるいは似た業種の方々が集まって、ただ集まるだけでは何の意味もないわけなんですけれども、これを勉強すれば確実にレベルアップできるという課題で結集するようなことが少し考えられていいのかなと思います。実は集まること自体がなかなか難しい業界であるという面もあるんですけれども、もう少しこの書かれていることを実際の力にしていくということになると、そのあたりも必要ななと思いました。

それからもう1つは、自然との共生ということではいろんなことが書かれていて、そのとおりだと思ふんですけれども、北海道の場合、内地であっても、もちろん農村部、山村部であれば自然との共生はあるわけですが、やはり自然との闘いのレベルが違うという面は北海道の場合はあると思ふんです。あるいは北海道の自然の圧倒的な存在なり奥の深さといったことをもう少し強調していいのではないかなと思っております。闘いの結果が現在の北海道の農村部でありますし、現在も闘いは続いているという面があるわけですね。ですから、もう少しそういう北海道らしさというものを別の面からも出していただいていいのではないかな。

そうすると、この中にフットパスという表現がございました。これはイングランド、ウェールズのフットパスからだと思いますけれども、これは何回か前のこの部会でも申し上げたわけなんですけれども、こういう懐の深い、あるいは圧倒的な力のある自然の中であれば本物のフットパスをつくっていくべきであって、ちやちなもので周りの目を多少引くというようなレベルのものではないものをつくる、また、それができるのが北海道だろうと思ふんです。ある意味では、観光にしる、こういった自然とのつき合い方にせよ、初心者向けと中級者、上級者向けというのがあって、上級者向けのものまでそろっている。それだけのものが北海道は提供できるというところまでいくと、実は初心者向けのものにも違った意味合いが出てくるような感じがいたします。

【南山部会長】田村委員、何か改めてございませんか。

【田村委員】お話を聞いていて思ったのですけれども、北海道というブロックは、東北とか九州にはない長期計画をつくり続けてきた。その実績は大きいと思ふんですね。この計画のつくり方に関してですけれども、新基軸を打ち出せる可能性はないか、と考えます。

イギリスが長期計画のつくり方を見直しはじめた。サッチャーさん以来、いろんな計画や事業が民間主導でつくられていて、地方ブロックや地域・都市にある複数の民間プロジェクトに対して、国が包括的かつ長期計画として強く関与しはじめた。

そのときに、これは櫻井先生のご専門ですけれども、行政裁判や第三者評価を行っている。計画の推進自体の中に評価をきっちり位置づけて進めるということが今注目されているんです。イングランドだけですけれども。そんなことも含めての北海道の新しい制度

設計のところの書きぶりは具体的に書けそうなのかなと思います。

あと、イギリスのようにやれとは私は申しませんが、P F IもP P Pも含めての民間の書きぶり、前から随分指摘されているんですけども、そのところがこの計画ではちょっとトーンダウンしている部分があるものですから、その書きぶりをもう少し強めてもいいのかなという印象を、櫻井先生、生源寺先生の話聞いて受けました。

【濱田委員】ここであまり申し上げると、自分の首を締めることになるような気もするんですけども、起草委員という立場を離れて発言をさせていただければ、第1次産業は、農業、水産業、林業とありますね。皆様、お気づきになったと思いますけれども、農業と水産業は食のところで書かれているんです。林業のところは新しい産業のところで書いてあるんです。だから、これについてどうするかなというのはまだ私自身は少し迷っています。ずっとお読みいただくと、林業のところがここでいいのかなという気はちょっとしているんですね。

それともう1つ、製造業について書かれていないんです。製造業のところはどこに入れられたかという、北海道というのは立地がいいでしょう。だから、立地を活かしてというところにインプリケーションとして入っている程度なんですね。だから、グローバル時代の北海道の産業をどうするんだといったときに、農業と水産業は食という問題があって、しかも坂本委員がおっしゃったように、マイナスのところとプラスのところがあるんですけども、ここは比較的全国の中で強いところだから、まずこれという書き方をしている。そうすると、林業の話が飛んでしまったので、表現はよくないのですが、どこかで拾いに行き書くという形になってしまう気がする。それでいいのかなという気はしているんですね。環境のところに入れられないかなと。

それから、製造業のことで言えば、やはりグローバル時代を生きていくといたら、製造業を無視しては書けないので、もう少し製造業というのを出したほうがいいかなという気はしています。何かその点について、他の委員の方々からご意見があったら承っておきたいと思います。

【宮谷内委員】20ページの「高速交通ネットワークの強化」の中で、自分の町のことを言ったら悪いのですが、実は私の町で「女性の目から見たまちづくり討論会」を17年間開催してまして、今年のテーマは「どのようにしたら定住が進むか」というのが課題で、昨日3時間ぐらいやりました。都会から来ていた人がほとんどで、お嫁に来ているとか、移住してきた人に聞きましたら、一番最後にお年寄りになって不安なのは、医療機関がない。今まさに北海道が言われている医療格差です。

例えば後志の中には倶知安厚生病院がありますけれども、脳や心臓が病気になった場合は、小樽、札幌まで行くわけです。救急の場合、小樽の消防本部で調べたところによりますと、首都圏では救急車で大体17分ぐらいで救急病院に行ける現状です。お母さんが陣痛で子どもが生まれそうになったときでも、そのぐらいの速さで行けるのですが、残念な

がら私どもの町は、小樽、札幌でなければ脳外科とか心臓外科には行けません。どれくらいかかるかというと、平均120分で、12分ではありません。約2時間かかるような中に、今、国道5号線とか、229号線があるのですが、実に時間がかかって、命に係わる道路を私は強調したいと思うのです。北海道は、私たちの町も町道の延長だけで470キロくらいありますから、そういう中で集落が分散しています。そうすると、そういう命に係わる道路ということをもう少しここで強調して、医療に係わるということは北海道全体の問題だということでも強調したいわけです。

もう一つは、ここでは議論をする機会ではありませんが、私の考え方を申しますと、私は今朝家を6時に出てここへ参りました。東京の空港に11時に着きました。これからまた蘭越まで帰るのですけれども、2時間10分くらいかかります。美笛峠を通過して朝6時に出て、そのように来るわけです。新千歳空港は、私もモスクワへ行かせていただいたり、いろんなところへ行かせていただきましたけれども、空港は立派な空港だと思うのです。でも、空港と地域を結ぶ、点から点を結ぶ道路の整備というのは、部分的には進んでいても、すごく遅れているということが言えると思います。

もう一つは農業に係わる問題ですけれども、私たちの後志管内というのは、14市町の中で、副知事さんもいらっしゃるけれども、北海道の農業の形態が集約されているということをご承知の方もいらっしゃると思います。果樹があり、水田があり、畑作があり、酪農があり、米でも私たちは本当に高い評価を得ています。そういう中で、その地域から消費地の札幌圏とか首都圏に持っていくと2時間、3時間かかるということになりますと、時間がかかって大変なわけです。そういう面で、まだまだ道路、高速交通ネットワークを強化していただかなかつたらいけないなということを感じています。

それから、農業の問題ですけれども、今、自給率がすごく下がって、45%にするというのが39%だったと思います。この基本的な原因は、ここに農業のことでいろいろ書いてありますが、規模拡大と水田農業の場合はやってきたのですけれども、かなり価格が下がって、やっていけないという現状もあります。そうすると、どうするかというと、水田がもっと改良されなかつたらいけない、基盤整備できなかつたらいけない。水田の表土というのは、私は専門家ではないのですけれども、作土というのがありまして、浅くても稲は水があって植えられます。ところが、今、転作が強化されていますから、表土がなかつたら畑作には向かないわけです。それから排水について、地下水がうんと高かつたら、湿気って作物はとれないわけですね。そういうことからいっても、まだまだ強化していかなくつたらいけないと思っています。何でこんなに自給率が悪いかというと、昭和40年代に19万戸もあった農家が、もう5万戸を割ってしまうとかいう北海道農業の現実を見たときに、私は本当にこれは国際競争、グローバル社会の中だと一概に言い切れるかというところに問題があると思います。

例えば英国もかなり前に食料自給率が下がったことがあります。今は70%ぐらいに

回復したと思います。それは国家政策の中できちんとやっていました。ですから、日本の場合も国会の党派に係わらず、食料の防衛のために、ただ戦争で防衛するだけではなくて、そういうことをもう一度考えていかなかったらいけないのではないかなと思います。ちょっと遠回りになりました。

したがって、関税もEPAもすべてアメリカの平均関税率は6%です。日本は平均関税率が12%で、例えば高いところの米だけが4百何十%と主張しますけれども、平均関税率が低いために、でこぼこなために、いわゆる食料というエネルギーは外国から入ってきているということです。そして、1分間に何人という方がこれだけ飢えて死んでいる中で、ほかの外国から食料を入れてきて、水さえないところから奪っていいのかという基本的な考え方がこれから問われるのではないかなと思います。

ですから、農業を保護し過ぎだと言いますけれども、これからはいろいろな面で基盤整備とか、あるいは農道の整備で国の手厚い考え方を持ち続けていただきたいなと思います。一端を申し上げて終わります。

【濱田委員】起草委員としてお話ししていいですか。幾つか貴重なご指摘をいただきました。今打ち合わせたわけでも何でもありませんけれども、私の個人的な意見を申し上げておきます。

まず、今日配られたものを皆さんごらんになると、4章立てなんですけれども、3章までは比較的短いんですね。7ページでおしまい。圧倒的に4章、これは各論ですから、ここが詳しく書かれているのは当然なんですけれども、櫻井委員がご指摘になったように、どんな報告書なのという1枚もののイメージが資料3に示されているんですが、これを見るとそのようになっていないですね。だから、今後、こういう1枚もののマップみたいなものをつくるときに、全体の構成の重みがちゃんとわかるようなつくり方をしないといけないなと思いました。

特に2章は、ここの1枚ものに書かれている文字数と、実際に2章の中に書かれている文字数とそんなに変わらないんですね。だから、2章は要約でも何でもなくて、みんな書いてしまったという感じになっている。委員がご指摘になったように、3章も似たようなことが言えますので、工夫をするべきだなと思いました。

それから、坂本委員がご指摘になったいわゆる目玉の話なんです。目玉の話は何回か議論しましたね。どこに書くとか、どこに入れるとか、いろいろ議論しました。ところが、4章は細かいことが書かれ過ぎていて、ここに目玉は書けないなと。ここに目玉を書けば、きっと結構なバトルになると思うんです。うちのところから目玉を出したのに、よそからないとかね。だから、目玉を書くとしたら、1章から3章の間のどこかに書くのだろうなとは思っています。ただ、この前、各委員に何か目玉はありますかと南山部会長が問いかけられて、皆さんから宿題が集まったのですけれども、その中でこれというのなかなか見出し難いなというところで議論は止まっているように私は思いました。

それから、嵐田委員から6つの圏域について道のほうでそういう形でお書きになるというご紹介がありましたけれども、これも実は1回は書いてやめた経緯があるんですね。グローバル化の時代の北海道という書き出しで国の計画は書いていくので、6圏域という話にしてしまうと、ちょっとベクトルが違うかなということで。広域生活圏、都市の機能がかなり離れていても使えるような広域圏をつくっていったら、結果的に北海道が幾つかの特色ある地域で構成されているという書き方にしておこうということだと私は理解しています。前回の開発分科会でも多重的な書き方ということになって、国は国の書き方があって、それが重なって全体とするということでもよろしいという話だったので、私はそんなことで理解しています。

あと、いろいろご指摘をいただいた点、開発という言葉を使ってよろしいという話をしていたので、非常に心強く思いました。それから、北海道の自然の深さということをもう少し表に出してという生源寺委員のご指摘もありましたし、農業経営の近代化、農業経営をどうするんだということも書き加えたほうがいいのかというのもそのとおりだと思います。メモをとりましたので、この後、仕事を完成したいと思っています。

【南山部会長】ありがとうございました。

私からも1つだけ言わせていただければ、濱田委員が最後に言われたことと同じなんです。林業というか、森林の位置づけと製造業の位置づけが、私もこれを読んだときに、思わず、森林はどこへ行ったら書いてしまいましたけれども、北海道から見た場合、森林のウエートはいろんな位置づけがありますね。環境問題もありますし、ものづくりの問題もありますし、その辺のところはやはり整理せざるを得ないかなと思います。今、少しずつ伸びてきている製造業、あるいは伸ばそうとしている製造業、これも何とかと私は感じました。

大変たくさんご意見をいただきました。これまで大変でした作業がさらに大変なことになるとは思いますが、11月28日に次回の計画部会を開催させていただきたいと思いますので、どうか起草委員の皆様はよろしくお願いします。また次回、ぜひ皆さんにご出席を賜りたいと思っております。

それでは、議事次第には、議題3、その他と書いてありますけれども、特にございませんね。あと、連絡事項等はありませんか。

【高松参事官】本日お配りした資料は、机の上に置いておいていただければ、後日郵送させていただきます。

【南山部会長】それでは、これをもちまして第5回計画部会を終了したいと思います。どうもありがとうございました。

了